

第3回 預かりではない教育・保育ってどんな仕事？ ～子どもと響きあう時、保育は生まれる～



講師 岡村 由紀子 氏

はじめに

手段として子どもを褒めても、子どもには伝わりません。褒めるということは、自分の体も心も“すごい！素敵だ！”と思った時に感動することなのです。以前、静岡大学附属幼稚園の藤野先生に「人を褒める時、クラスに子どもが 30 人いたら、30 通りの褒め方がある。それがプロなんだ。」と言われたことがあります。若い頃は、どう褒めようかと方法ばかりを考えていました。そうではなく、自分が子どもを“素敵だなあ”と思えるかどうかの方が大事なのです。子どもが絵を描いて保育者に持ってきた時、どの子にも「うん、いいね。」と同じ言葉で褒めても、子どもの心には落ちません。子ども一人一人を見ることがとても大事なのだと思います。

1 保育観・子ども観

いろいろな子どもがいる中で、保育者の集団がきちんとした考えを持っていないと、特に発達障害のある子に対し、他の子どもと比較して、できないことややれないことを伝えようとする保育になってしまいがちです。

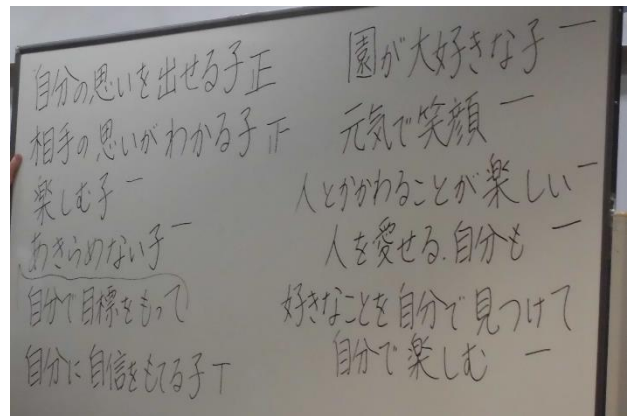
5才児に「もうお昼よ、片付けてね。」「次に集まるよと言ったら集まってね。」と言えば、だいたいの子は集まることができます。でも集まらない子がいた場合、保育者がその子をどう見るかによって保育は変わります。この見方が保育観・子ども観です。この観が鍛えられていないと、教育が手段化していきます。子どもの行動をうまく流すようにするのが、保育や教育なのでしょうか。

私は何年前か前、行政の方に、「保育や教育はサー

ビスでやっているのではない。子どもの人格をつくるのが仕事だ。」と話したことがあります。決して預かりで保育をしているわけではなく、私たちの仕事は、「人を育てる」ことなのです。大人になって生きていく時の土台をつくっているのです。

2 保育者が願う子ども像

私たちは、どんな子に育てたいと願って日々保育をしているのでしょうか。



願う子ども像を、見える力と見えない力で分けてみると、ここに出された意見は全て“見えない力”です。つまり、人格の形成とはこういうものです。跳び箱や縄跳びができることとは違います。これらは、人格が豊かになるための活動や経験であって、結果として見えない力が育ってくるのです。

自己主張とは、自分の思いが出せるということです。自分を主張して受けとめられた子は、相手の思いがわかります。“楽しむ”というのは、自分が主人公でないとできません。自分で目標を持って諦めないということは、生活の主人公だからできるのです。自分に自信が持てるということは、自己肯定感

です。ここまでで共通しているのは、“かけがえのない自分”が中心にあるということです。そういう子は園が大好きになります。意地悪をする子がいても園が大好きなら、「僕は意地悪は嫌だよ、やめて。」と言って、それを乗り越えていける力を持っているのです。おもしろくなければ元気にも笑顔にもなれません。

自己肯定感とは人間関係の中で育ちます。自己肯定感がないと、人と関わることの楽しさを感じ、この人って素敵だなと思える生活はできません。また、好きなことを自分で見つけ、「人生はオンリーワンで、自分のためにある」という考え方を形成していくのが、この見えない力なのです。

今、「育てたい10の姿」が提唱されていますが、無藤隆氏は、「10の姿は、子どもに当てはめるために作ったものではない」とはっきり言っています。

「保育者が自分を振り返るため」に作ったと言います。わからないことをわかろうとする子どもの意欲的な姿は、日常の保育で育まれていきます。今までの幼稚園や保育所の生活や遊びの中に、十分あるのです。人と考えが違った時に「どうする?」「こうする?」「貸して。」「待ってるね。」などのやり取りをする中で育っていく力であって、「これをしたら、こういう力が育つ」というものではありません。

人格の土台は、日常の生活や遊びを豊かにする中で育ちます。ですから、今まで乳幼児期の保育でやってきたことを、保育者には大事にしてもらいたいと思います。

3 教育・保育は「子どもの未来を創る」

教育・保育は、子どもの未来を創っています。自分が困っていても、いじめがあっても黙っている姿は、本当にそれでいいのでしょうか。幼児期に愛される経験をし、人の気持ちがわかる子に育てていきたい。誰かがいじめていたら、「やめろよ。」と言えらる子を育てなければなりません。そういう勇気や人

の心がわかる土台は、生活や遊びを豊かにする中で育っていきます。私たちは、子どもの中に「人間らしく生きていく力」を育てていくのです。

それが障害のある子になると、その子をどう育てていくかということが中心になりやすい。保育者は一生懸命です。このままではその子がかわいそうだと思ってしまうのです。でも、“今は、あそこで遊んでいるのが楽しいんだよね”“あの集中力は、何だろう”“なぜあれが魅力的なんだろう”と考えていくと、その子の見方が大きく変わってきます。つまり、生まれてきたら、その子は人格を否定されることなく生きていく権利を持っています。それを創るのが私たちです。

4 人間らしく生きていく力とは

…遊び・生活（行動）の主人公になる

それは、遊びや生活の主人公になるという経験から育ちます。つまり自分が大事にされるということです。

例えば、グループの名前を決める場面です。一人は「さくら」がいいと言い、もう一人は「ランドセル」がいいと言います。保育者が「名前は1個なの。」と言うより、子どもの話を聞いた結果、みんなが納得して「“さくらランドセル”グループにしよう。」と言って合意することがあります。意見を聞いてもらったという経験が、活動の主人公になるということなのです。

子ども一人一人の表れや願いをくみとり、みんなと違う表れをする子がいても、その子にとって今それが意味のあることなら、その意味のあることを友達に伝えていきたい。そして「それが意味のあることなんだね」と認め合うことをしていけば、認めもらう経験を重ね、やがて友達に近づいてくるのです。つまり、大人がどういう視点を持つかが問われているのです。

5 <事例>お米は、だれのもの

11月のある朝、お米当番の子どもが、案山子が倒れていたのを見つけ、スズメがお米を食べに来たのではないかと騒いでいます。私はこれを、子どもたちが育つチャンスだと考えました。そして私は、「そうかーおいしかったんだね。お米をスズメにあげようか。」と気持ちを込めて言いました。すると5才児の子どもは、「やたらなことは言わないで！これはみんなが決めることなんだよ！」と怒って言うのです。確かにここまで育てるのは大変です。山から土を運び、水を入れてどろどろにし、田んぼの状態にしたのです。子どもたちは、土日や夏場も当番で水あげに来ていました。

「せっかく苦労して作ったのに、いやだ。」「先生のじゃあないんだよ。」子どものものすごい雰囲気には押し、だんだん形勢が悪くなっていきます。私は、子どもたちにもう少し考えさせたいと思い、「みんなはおうちの人にご飯を作ってもらい、お昼は給食の先生に作ってもらって食べられるけれど、スズメやカラスにはご飯を作ってくれる人はいないんだもん。」と言うと、普段おとなしいまゆこちゃんが、「みんなは静かにして。はいしんちゃん、どうぞ。」と司会を始めます。しんちゃんが「せっかく作ったんだからあげたくない。カラスだって、自分で食べるものさがすし。」と言います。ひさしくんは「みんなのお米はあげないで、先生のだけあげればいい。」と言い、あきらくんも「しんちゃんと同じ。」と続きます。

年長児は話し合いで、「どっちでもいい」とは言いません。「今は意見がまとまりません。」とか「〇ちゃんと同じです。」「わかりません。」など、自分の考えを言います。

さらに「先生のだけあげて。」「スズメは、ミミズとかを捕って食べてるし。」という意見が出され、けんやくんは、「あそこまでできたのに、あげちゃうなんていやだ。」と主張します。みんなすごい剣

幕です。

子どもたちは、私の米だけを抜いてスズメにやればいいと言っていたのですが、「先生のを抜いても、他のを食べるんじゃないの？」と気づく子もいます。さすが年長です。科学的思考になるのです。

さらに、めいちゃんが「あとってないのは誰？」と聞きます。おとなしいだいしくんも言います。「あげたくない。けんやくんと同じ。」するとけんやくんは「ぼくは、いい意見だったなー。」と言います。そしてりさちゃんが決め手のように、「みんなが作ったんだから、みんなが決めればいい！」と言うと、「そうだ！」「そうだ！」となりました。めいちゃんが「じゃあ、あげたくない人？」と聞くと、みんな「ハーイ！」と手を挙げました。

こうなると、保育者だって意見を言わなくてはなりません。「わかりました。みんなの考えを聞いて、わたしは意見を変えます。」と言うと、すごい拍手が起きて、「ありがとう！」「ありがとう！」の声。先生が意見を変えたということは、自分たちが行動の主人公になり、受け入れられたという経験になります。先生に言われたからではなく、主人公である自分たちで決めればいいんだと感じているのです。いろいろなところで子どもの意見を聞いて考えさせていくことで、子どもが主人公になる力となっていきます。

6 保育者の仕事の特徴

保育者の仕事には、3つの特徴があります。

- ①子どもの未来に責任を持つ
- ②子どもの可能性に無限の信頼を寄せる
- ③子どもにエネルギーをもらっている

7 保育者自身が保育環境…保育者のセンス

「保育者のセンス」は、本を読んだり、勉強したりして鍛えられるかというところではなく、どちらかというところ、保育観や子ども観、人間観、自分がど

のように思うかが大事です。お米の事例のように、稲を作るという目標で指導案を作りますが、行動の主人公は子どもです。保育者が子どもたちに、自分で好きなことを見つけて、自分の道を選んでほしいと考え、子どもの願いを大事に受け止めながら保育を創ろうという子ども観や保育観があると、子どもの発言に対し、“そうなんだ”と思えます。子どもをどう見るか、一瞬のうちに、子どもの言葉をどう大事にしようかと考えます。保育の土台になる自分の人間観を鍛えないといけません。

8 どうしたら鍛えられるか

保育者のセンスは、保育者自身の今までの生活や経験、出会いでつくられていきます。丸ごと自分の生き方です。大阪教育大学の秋葉英則氏は次のように言います。「教育という仕事、営みはどんなに優れた先達者であろうと、その先達者一人でなせる仕事ではない。」言い換えれば、園長や主任等だけで保育を創るのではなく、そこを構成する1年目の保育者を含めたみんなで創っていくのです。子どもが最善の利益を受けるような保育をするには、大人集団が楽しく保育を創り出していることが一番大事です。子どもをどう見るかを鍛え合うことが大事で、みんな違っていいのです。その違いを感じ取れる感覚、子どもを育てる輪の中にいるという感覚を持ち、自分とは違った意見を大事にしていきたいです。

山梨大学の加藤繁美氏は「子どもの実践を記入し（ちょこっと記録）、その中に見える子ども・保育者の姿・営みなどが、子ども理解・保育観・そしてセンスを鍛えることになる。」と言います。保育記録は、自分にとって楽しかったことや、子どもが素敵だと思ったことを書きます。これらが、保育者のセンスを上げていきます。人間関係や子どもの育ち、指導が見えてきます。そして記録を書いた後、できれば保育者と論議します。経験年数によって学ぶと

ころが違うので、交流すると実践が深まります。

9 子育て環境を作る…一人の人間として

今、一人の人間として子どもを育てていく環境は、大変厳しいです。例えば、バスや電車の中で赤ちゃんが泣くと、嫌な顔をする大人がいます。“赤ちゃんは泣いて当たり前”という文化を取り戻さないと、父親や母親を自己責任と追い詰め、虐待に向かわせてしまうこともあるのです。

子どもを真ん中にした豊かなネットワークをつくるのが保育者の仕事です。大人たちがみんなで子どもの幸せを考えた時、子どもはもっと幸せになり、笑顔が溢れるようになります。

子どもが障害を持つ場合、親たちは数倍苦しい思いをしています。私たちにできることは、全ての子どもが地域の中でみんなに見守られていけるような根をつくる構成員の一人として、子どもの幸せを求めて環境を作っていくことです。そうして考えてみると、この仕事は、結婚していなくても、子どもがいなくても、男性であってもできます。つまり、プロとして子どもの最善の利益を追求することが求められる仕事なのです。

終わりに

障害があることによって「人格の形成」という視点よりも、みんなと違うことに目が向きやすい。本当はその子にとって砂場で遊ぶことが大事な時なのに、4、5才の子どもがずっと砂場だけで遊んでいると心配になります。でも、その子がその時に人間として育っていくには、この時間が大事なのです。

通常の子どもの違いをどのように伝え合うのか、否定せずどう保育を創っていくのか。違うことを認め合うというのは、“〇〇ができる”で比べるのではなく、“人間としてこういう力を育てる”という視点に立つことで、障害があってもなくても同じ保育が生み出されることになるのです。

第3回 保育者資質向上研修会
平成29年9月12日
会場：焼津公民館